（２）第２回 公開研修会 講演記録

地域における子育ちとおとなの役割

講　師:龍谷大学 上杉 孝實 教授(当時)

※この時の公開研修会では、講師の上杉先生はビデオを用いられ、大阪府豊中市の泉丘公民館の事例が紹介されました。報告書でも、そのビデオの内容を１枚にまとめ、ご紹介していますが、写真等が多用されておりますため、このページでは削除しております。

1. 子どもの育ち

(1)　自立と人との関わり

今日は、「地域における子育ちと大人の役割」というテーマで話をさせていただきますが、「子育て」でなくて、「子育ち」としているのには意味があります。もちろん、「子育て」が背後にあるのですが、子どもが常に受身で育てられるのではなくて、子どもが「自らも育っていく力」をつけるきっかけを提供しなければならないということが今日的な課題になっていますので、このようなテーマをつけました。

子どもの「育ち」というときのポイントは、「自立」という概念です。自立とは、厳密に言うと何もかも自分でやるという意味ではありません。大人は何かを決める時、自分の意志で判断し決定します。それは、自立のひとつの典型であるわけです。従来、子どもはなかなか自立ができない、自立の力はないとみなされてきました。では、子どもたちに自立の意志がないのかと言うと、「自分も大人のように自分の足で立ってみたい」とか、「自分の考えにそって行動してみたい」という気持ちを持っているのですが、自信を持てるような状況にないわけです。かつて、農家では子どもがある年齢に達すれば、農作業をとおしてかなりの活躍をしますし、自営業の家庭では、家業の手伝いをとおして次第に自分で判断し、行動する力もつくなど、自信を持てる場面がありました。しかし、サラリーマン家庭が増えている中で、今は自信をもつ場面が少なくなっています。そういう中で、子どもたちの中に自立への「あせり」が見えます。

近年、子どもによるいろいろな事件が報道されています。あまりそういう見方をされていませんが、私は自立への「あせり」があると見ています。つまり、子どもたちは大人から見れば子どもですが、子どもなりに大人に近づいているという意識をどこかで持っていて、自分の中にそういう力があるということを確認したいという気持ちが大変強いのです。大人は「子どもがこんなことをやった」と大変驚くわけですが、別の見方をするならば、「子どもだからこそ、やった」と言えます。子どもは、大人が考えていないような行為をすることによって、「自分が小さい子どもではない」ということを確認したい、あるいは、「常に受身で、大人の指示がなければ何もできないという存在ではない」ということを示したいという気持ちを強く持っています。

小学校の段階だけでなく、子どもは小さい時から絶えず、そういう姿を示すものです。従来、心理学等で「反抗期」と言われてきたように、大人の言う事に素直に従わないで、逆に、どれだけ自分が大人をコントロールできるのか試してみようとさえすることがあります。子どもがぶつかってきたときに、子どもの言いなりになって、大人がずるずると下がっていけば子どもに力がつくかというと、そうではありません。「大人ってこんなに頼りないものか」と思うだけで、失望してしまうかもしれません。逆に、子どもが立ち向かってきたときに、「何を言う」と口をふさいでも、あるいは、叩きつけても、子どもに力はつきません。相撲では、横綱が前頭や十両を鍛えるのに「胸を貸す」という言葉があります。いきなり投げ飛ばすのでもなく、ずるずると下がるのでもなく受けとめて、そして「もっと力を出さんかい」というようなやり方で鍛えるのです。基本的にそういう姿勢が大人たちに必要で、子どもの言い分は言い分として聞いて、しかし、それはそうではないのだということがあれば、そのことをきっちりと子どもに返してやるということです。子どもはそれを素直に聞くとは限らないのですが、大人がそこでしっかりした考えを示せば、

口では反抗していても、どこかで心の中に入り込んでいる面がありますし、親に対して密かに「さすがやな」と感心する場面もあるわけです。そういう中で、子どもたちの自立への道を支えてやらなければなりません。

(2)　子ども集団の重要性

小学校高学年ぐらいになると「ギャングエイジ」と言われ、発達段階の特徴として結束の非常に強い集団をつくって行動すると考えられてきました。この年齢になると幼児の段階は脱していて、自分たちがどれだけ大人とは違った独自の世界を構築し、自分たちの判断や力でいろいろなことができるということを確かめたいという気持ちが高まってきます。一人では不安もありますし、思い切った行動も取りにくいのですが、仲間が一緒であれば安心して、従来にないスケールの大きい行動をとることができ、それによって自信をつけていったのです。従って、この段階では、いたずらもよくありました。今だったら、スーパーで物を勝手に持っていけば万引きだといって罪になりますが、昔は、畑にあるものを、1つ2つもいで食べて、それが見つかって叱られても犯罪扱いされるわけではないといった「いたずら」はよくありました。いたずらも見方によれば、子どもたちが自分たちのペースで行動するという実感を持ちたいという表れだとも言えます。

しかし、最近はそういう仲間集団というものが非常に乏しくなっています。小学校くらいの段階でいろいろなことをやって自信をつけた、あるいは、仲間と共にスケールの大きい活動をして自分たちもこれだけのことができるのだということを確認する場面がなかったとすると、中学生くらいになるとそのあせりは非常に強いものになる可能性があります。すると、ちょっとやそっとのいたずらではすまない、大袈裟な言い方をしますと、大人があっと驚くようなことをやることによって初めて「自分たちもこれくらいのことができる」というような感じになってくるわけです。少年が酒を飲んだり、たばこを吸ったりすることなども、法に照らせば違法行為ですが、大人ぶってみたいという意志のあらわれでもあります。中学生くらいになれば小学生のようにはいかないわけで、そういった違法行為、あるいは、すれすれのところで自分を出そうという気持ちになる人たちがいます。その人たちの全てがそうではないけれども、かなりの人たちが小学生時代はあまり活発な仲間集団での行動を経験していない、どちらかといえば大人しいタイプの人たちで、そこには自立への「あせり」が顕著にうかがわれます。

2. 地域の意義

(1)子どもの自立と家庭教育

今、私たちが考えなければならないのは、「自立」は人との関わりの中で出てくるということです。もちろん、親の姿勢も大事ですが、親だけでは十分ではありません。なぜなら、子どもたちは心理的には次第に親から離れていくというのが普通の姿だからです。

20歳代くらいになれば自信もついてきて、自分がちゃんとした一人前の人間だということが分かっていますから、親の言うことにいちいち逆らわないで素直に応答できます。でも、10 代の後半くらいですと、まだ不安定というか自信がないだけに、親から離れているというポーズを取りたがることがあります。親の方は離れていったら大変と、ますますかまおうとすると、余計にそれを振り払おうとします。10 代が難しいと言われるのはそういうことです。

1つには、親が子どもにもっていく話題にも問題があります。小さい子の場合には、例えば学校であったことや、友達のことを尋ねるということが、その子にとっても嬉しいといいますか、話したいことでもあります。しかし、10 代の後半くらいになりますと、「今日学校で何があった？」「友達と何をした？」とか聞きますと、「ほっといてくれ」といわんばかりの態度で向こうにプイと行ってしまうことがよくあります。「話し合いが途絶えたのは非行の始まりだ」とか言って親があわてて追っかけていくと、ますますこじれてしまいます。やはり、社会の出来事であったり、趣味とかスポーツといった広がりのある話題の中で、子どもが何を考えているか、どういう生活状況にあるのかということをつかんでいくことが必要なわけです。

よく、「中学生になったらお父さんの出番です」と言われますが、私は適切な表現ではないと思います。というのは、それまであまり子どもに関わらないでいて、中学生になってからお父さんが叱っても、子どもは表面ではともかく、内心は反発するだけかもしれません。小さい時から自分に関わってくれ、自分と一緒に遊んでくれたり話を聞いてくれたりする父親であってはじめて、中学生になってからでも、口では反抗しながらも、小さい時の思い出をだぶらしながら、父親の言うことが、それなりにきちんと受けとめられるのです。中学生になってからが父親の出番と、もし解釈されるなら、これは大きな間違いだろうと思います。もちろん、中学生になっても出ないお父さんよりは、まだましではありますが。

(2) 地域の支え

今、家庭教育で大きく問題になっているのは親の孤立状況です。親に不安や思い違いがあると、子どもに対する教育が適切なものになりません。また、元来、子どもは自分の思い通りになりませんから、そこでイライラして場合によっては児童虐待になってしまうということもあります。これはどこの家庭にもある問題で、一緒に考えていかなければならないという支えあいがないと、家庭教育がうまくいかないのです。かつての日本の家庭教育もすべてうまくいっていたわけではありませんが、何よりも地域でつながりがあり、支えあいがあったため、比較的、家庭教育が容易でした。

「あそこの家庭はしょうがない」などと決めつけてしまったら、そこの子どもは被害者の形でおかれたままになってしまいます。一人の社会人として育っていく子どものことを考えれば、家庭がしっかりしていなければ、余計にそれを地域で支えていくという取り組みが必要と思います。

特に子どもが大きくなるにつれ、「地域の教育力」が大事になってきます。子どもは口では偉そうなことを言っても、どこかで不安ですから、自分を支えてくれる人が欲しいと思っています。本当は親にすがりたい気持ちがあっても、心理的な離乳の過程では素直にそれを出せません。そうしたときに、子どもにとって少し距離がある、おじさん、おばさん、お兄さん、お姉さんというような人たちが、子どもたちにいろいろと話をしたり、声をかけたりすると、子どもたちにとって支えとなります。細かい注意をするとか、親代わりに何かをするということではなくて、ちょっとした声かけでもいいし、また、子どもに「いつでも何かあれば話しにおいで」というような姿勢でいいと思います。

そういう関係を作ろうと思えば、子どもと知り合いの関係になっていなければなりません。あいさつ運動などもありますが、何か共同作業といいますか、一緒に活動の機会を持つことで、自然に声をかけるなど、話しができるようになります。まさに他人が子どもに関わっていくということです。親としては、うちの子に他の人も関わってもらうし、自分も他の子どもに関わっていくという関係が大事になってきます。実際に私も経験したのですが、子どもは自分のことをなかなか親に言わない時期が出てきます。しかし、友達どうしでは、結構いろいろな話をしていて、子どもの方も自分のことは言わないけれども、自分の友達のことは結構親に話したりします。「何々君はこんなこと考えているで」とか言います。「お宅の子どもさん、こんなこと言っておられるそうですね」と、子どもの友達の親から聞かされることもあり、「えっ、うちの子、そんなこと思っているのですか」と、なるわけです。だらしない親だと思われるかもしれませんが、意外とそういうもので、他人の子どもに関わることは、自分の子どもを知ることにもつながり、そういう意味で大人どうしのつながりも大事になっているのです。

(3) 多様な人とのふれあい

子どもも大きくなってきますと、自分の将来について思い描くようになります。日本の場合、アメリカなどの国々と比較しますと、残念ながら、将来の自分の職業や将来の自分の姿について親子で話すということが非常に少ないというデータが出ています。アメリカは、こういう仕事をするというように職種が強く意識される社会ですが、日本ではどこの会社に入るかが意識され、入ってからもいろいろな仕事を転々と変わるという仕組みになっていますから、どんな仕事をしたいかと言われても親の方も子どもの方も話がしにくいと思います。しかし、子どもが将

来どんなことをやりたいのか、何ができるのか、そのためにどんな準備が必要なのかということについて考える機会があれば、子どもにとっても将来に向けての展望がひらけ、また、それまでに何をしようかということで、計画的に取り組むことが可能となります。そういった会話が大事なわけですが、今のところ残念ながら程遠い状況にあります。

しかし、そういう中でも、子どもは自分の将来について考えますので、実際に働いている人の姿を見たり、あるいは、実際に仕事をしている人の話を聞いたりすれば、将来の展望が具体的な形で見えてきます。親がモデルになっている場合もありますが、親の仕事は多くの仕事のごく一部ですから、親だけが子どものモデルになるとは限りません。世間にはたくさんの仕事の種類があり、自分はどれに向いているのだろうかと考える時、近所に、あるいは地域にいろいろな大人がいて、その人たちがどんな仕事をしていて、どのように頑張っているかが見えた方が、未来に向けて自分が育っていく上で参考になるわけです。

今、全国のいろいろな学校(特に中学校が多い)で、子どもたちが社会体験といいますか、多くは職場体験を行っています。近隣で言えば、兵庫県の中学 2 年生が「トライやるウィーク」ということで、1 週間の職場体験をしています。そこでは、かなりの子どもがしっかりしてきたとか、今まで漠然としていた仕事の世界というものが具体的なイメージでつかめるようになった、あるいは、地域の人々にふれることによって、地域の人々も子どもをよく知り、子どもと地域の人とのつながりが増してきたという成果がみられます。

子どもが成長していく上で、いろいろな地域の人とのつながりは欠かせないことです。自分の仕事について話す、あるいは、自分の仕事の場をみせるというようなことは、年1回位であれば大人の側も可能ではないかと思います。

(4) 生活体験の場

今の子どもたちは、いろいろなことを経験する場がなくなっているので、生活の体験の場を増やしていくことが重要です。幸い、地域にはいろいろな人がおられるのですから、それぞれの人々の経験を伝えたり、あるいは、その経験を子どもに体得させるように導いたりということが行われたら、個々の家庭ではできない生活体験の場が出来上がってきます。

例えば、今、核家族の中で高齢者と子どもが接触する機会が少なくなって、いろいろな問題が出てきています。「お年寄りを大切に」と言いますが、普段からあまり高齢者に接していない子どもは、高齢者を避けるようなこともあるかもしれません。また、最近よく問題になっている命というものについて、自分が本当に親しくしている人、あるいは、自分を可愛がってくれた人との関係を基盤にしないと、子どもにとって命というものがなかなかピンと伝わってきません。テレビを見ているだけでは、命が失われてもあまり痛切に感じないのです。小さい時から親しくしてもらった、そして、自分をかわいがってくれた高齢者には、子どもは特別な思いをもつことができます。親が歳をとっても、「ああ、あのときのおじいさん、おばあさんに似てきたな」というように、親しみをこめた形で受けとめることができるのです。そうでないと、「よぼよぼしてしまって」などと、マイナスイメージだけを貼り付けてしまうということになりかねません。このごろ、高齢者の施設に子どもが訪問するという取り組みがよくありますが、一時的なものだけでなく、日常的に地域の高齢の方たちとの触れ合いができるような努力が求められています。

また、大きくなるまで赤ん坊を抱いたことがなく、自分の子どもが生まれて、はじめて小さい子どもを抱いたという人が非常に増えてきています。そういう人の中には、赤ん坊のことを「ぶよぶよしていて気持ち悪かった」と言う人もいます。冗談かと思いましたら、本当にそう思ったなんて言う人がいます。全くかわいくないということではないにしても、今までに経験したことがないことへの不安が、そういう心理にさせるのでしょう。子どもの時から幼い子ども、あるいは赤ん坊に接することで、小さい子の扱い方が身につくということもありますが、それ以上に小さい子に関わる際の感情、心理が育っていきます。少子化の社会で、それが自分の弟、妹というわけにはいかなくなりましたが、近所には小さい子どもがいますから、小さい子どもと接触する機会を子どもの時からもつことができればいいと思います。先ほど紹介した「トライやるウィーク」でも、保育所で小さい子どもに接して感激するなど、新

たな気持ちを持って帰ってくるということが見られます。そういったつながりの機会が地域の中にあるということが非常に大事です。

3. 地域における活動

(1) 大人と子どもの共同活動

地域で子どもたちが大人と触れ合って、そして、活動していく機会を増やすということが今日的な課題になっています。その場合に子どもが常に受身で、大人の指示に従うだけでは、子どもの力が育ちません。つまり、大人が用意して子どもがお客さんで参加するという方法とは違うものでなければと考えていただきたいと思います。

地蔵盆なども、京都では伝統行事で、従来は子どもだけでいろいろやってきたわけです。しかし、この頃は、地蔵盆というと高齢の方がいろいろ用意されて、子どもがお客さんになって、何か物をもらいに来るという形をよく見かけます。その他にも子どもがお客さんになるということが今、非常に多くなっています。「子どもにやらせてもできないから」というのが大人の言い分なのでしょうが、それによってますます子どもがお客さん気分になったのでは、共同活動とは言えませんし、「育つ」ということが十分ではなくなってしまいます。やはり、子どもも一緒になって活動の担い手になっていくということが必要です。やらないからほっておくというのではなく、一緒にやるように根気よく働きかけていくことが大事と思います。

最初から何もかも楽しくスムーズに行くとは限りませんが、基本的には子どもたちは大人に励まされ、認められるということに、非常に喜びを感じます。親も結構、子どもを誉めますが、どこかで自制心が働きすぎてしまう場合もありますし、子どもの方も親から誉められて悪い気持ちはしませんが、他人からも認められれば、これは本物だと思うかもしれません。また、よその子を誉めるというのは、親以上にやりやすい面もあるわけです。大人でもそうです。近所の引越しを手伝いに行くといそいそとやる人が、自分の家の片付けとなるといっこうにしないと、よく文句を言われることがあります。自分の家で一生懸命やっても誰も誉めてくれませんが、よその家で手伝うと、「助かりました」という言葉を必ずかけてもらえますから、そっちの方がやりがいがあるということになるわけです。まして、子どもの場合はそういう面が強いですから、そのあたりを考えておく必要があると思います。

私は30歳代から40歳代の初めの頃、千里ニュータウンに住んでいました。新しい町で、移っていく人も多かったのですが、そこに住む期間が短くても、「ここで育つ子どもたちにはここが故郷」を合い言葉にして、私たちは子どもと大人が一緒になって決め、一緒になってするというやり方で取り組みました。あらかじめ、大人の役割はこれ、子どもの役割はこれというように分けてしまうのではなく、ひとつの役割を子どもと大人の両方でやるのです。例えば、運動会で何か物を出してくる時にも、大人と子どもが一緒になって運んでいく、コーナーに立つ時も大人と子どもが交互に立つ、テープも片方を子どもが持ち、もう片方は大人が持つというように役割を共有します。そこでお互いに声を掛け合う中で、大人から「なかなかしっかりしているな」と評価の言葉も出せますし、子どもも「やっぱり大人はすごい」と思うことがあります。分けてしまうと、お互いに相手が見えはするのですが、実感としてそれが伝わるとは限らないのです。

共同活動をすすめていく中で、大人と共に子どもも討議の場に入れて、物事を決める時に発言を促すことにも取り組みました。子どもの発言は大人から見れば不十分な点もありますが、最初から押え込むのではなく、子どもに言わせて、それをより適切に表現し直すように援助します。そういう中で、子どもたちが次第にしっかりしてくるということを経験しています。「子どもの社会参画」と言いますか、自らも決めることに関わり、また、大人がどうやって決めるのかという姿を見ることも、子どもにとって大きな刺激になるのです。

(2) 文化活動

地域で皆が一緒にやる活動として、スポーツ活動は大変盛んですが、スポーツが苦手な子どももいますし、スポーツにはしばしば「勝負」がつきまといますから、スポーツ活動だけではものたりない場面も出てきます。活動

の中身についても工夫がいるわけです。文化活動として、音楽や絵、あるいは、一緒に何かを製作する活動、さらには、地域についていろいろ知る活動としてオリエンテーリングを地域でやったというところもあります。オリエンテーリングというのは、通常は自然の中に出かけていって、いろいろなポイントを通って早くゴールに到達するというものですが、地域の中にポイントを作って、子どもたちが地域の姿に気付くようにしていくという試みをしている例もあります。あるいは、地域の地図を作ることによって、どこに危険なところがあるかなどを確認するという活動をしているところもあります。

(3)豊中市の取り組みについて(ビデオ)

これからビデオをご覧いただきます。大阪市内の事例についてはお知りになる機会もあるでしょうし、教育委員会もまとめているでしょうから、あえて、大阪市外の例を持ってきました。豊中市には公民分館という仕組みがあります。これは、公民館の分館という位置づけになっていますが、実際は地域の住民で組織を作って運営しています。分館長も公民分館主事も運営委員も皆、住民です。実は私も 10 数年間その活動をやってきました。公民分館の活動も初めの頃は必ずしも子どもに焦点が当っていたわけではなく、地域の運動会や、文化祭に子どもも巻き込んでいく以外は、大人の活動が中心でした。でも、近年では子どもを支える活動、あるいは、子どもと共に行う活動が多くなっています。そういう点ではまさに、皆様方のご活躍の状況と重なってくるものがあると思います。

今日は、公民分館の中から生まれてきたグループが中心になって、障害のある人でも安心して行動できるという観点からチェックをし、まちづくりにつながるものとして作成した「地域のマップづくり」をご覧いただきます。子どもたちも、主体的に関わっています。これは、大阪府教育委員会が製作したビデオです。府教委が大阪府内のいろいろな団体や市町村に呼びかけて応募してもらい、その中から毎年 4 つの団体を選んで、その活動をビデオ化しています。ビデオ制作費だけでなく、活動援助費も若干出しています。これは、昨年度の成果という形で今年作られたビデオです。私も審査委員の一人になっており、直接ご参考になるかどうかは別としまして、地域との関わりの活動例としてご覧いただきたいと思います。

これは豊中市の例ですが、公民分館というのは小学校区にひとつずつあり、大阪市の生涯学習ルーム事業が各小学校区で実施されているのとよく似ています。生涯学習ルーム事業で生涯学習推進員として活躍されている方も、今日ここに参加されているとのことですが、推進員の皆さんが公民分館でいう運営委員というふうに考えてもらってもいいと思います。公民分館も初めの頃は大人のための講座・学級が多かったのですが、最近ではこういった活動にも取り組むようになってきています。生涯学習ルーム事業も当初は、大人向けの講座・学級が多かったのですが、最近では青少年に関わる活動に取り組まれているルームが増えてきていますし、また、絵を描くとか、音楽、お茶、お花など、文化活動の中には大人と子どもが一緒に学ぶことが可能なものも多いですから、子どもも参加するルームが増えてきているという点も似ていると思います。

従来であれば、大人、あるいは子どもというふうに対象を限定していましたが、大人と子どもが一緒に学ぶ機会を用意していくということは重要で、今後はもっと増えてもいいと思います。さらに、講座・学級だけでなくて、このように地域を知る活動や、楽しみながら地域にとって重要なバリアフリー、行動する上で障害の無いまちづくりにつないでいくというような取り組みも、ひとつのアイデアと思います。

4. 活動のポイント

(1)継続性

活動をすすめるときには、ある程度、継続性が必要です。イベントも結構ですが、1 回きりで終わってしまうのでは、もったいないと思います。いかにして継続的な活動とつながりのあるものにしていくのかということが大事だと思います。今ご覧頂いた活動では、準備の段階から実際にまちをまわってみる、そして、それを記録するという

ように継続的な活動をしています。また、例えば、地域で文庫活動をやっているところでは、毎週定期的に文庫を開き、年長の子どもが文庫の運営の役割も担うというところがあります。継続性がある活動がなされれば、子どもたちにとっても身についたものになっていくと思います。

(2)リーダーと育成者

先ほど、子ども自身が大人と一緒に「決める場」に加わるということが必要と言いましたが、さらに、子どもたちの中で役割分担をして、リーダーも子どもたちの中から出てくるようにすることも重要です。ただし、子どもの場合、大人が関わらないでリーダーがうまく機能できるとは思えません。背後にいて支える「育成者」がどうしても欠かせません。

大阪市の場合、子ども会がほぼ全部の小学校区にあると思います。かつて、大阪市でも子ども会では、大人が役員になっていて、子どもが会員というような、「お客さん」に近いような状態もありました。現在では、子どもたち自身の組織である子ども会の役員には子どもがなり、それだけでは、活動の条件を整えるということで難しい面がありますから、大人たちが「育成会」という子ども会を支える組織を作って、資金面や、活動のためのいろいろな配慮をしていくという組織体制になっています。全国でもそのようになっています。

子どもたちが活動する場合に、子どもの中からリーダーが出て、さらに、できれば、子どもの年齢に近いお兄ちゃんお姉ちゃん位の人に、リーダーの良い相談相手になる指導者になってもらい、親や地域のいろいろな大人が、指導者をバックアップする存在になれば、なおいいです。実際にはなかなかそうなっていないところに問題があると思います。

親や地域の人たちがいい指導者を見つけ出せれば、子ども会は発展すると思います。広い地域の中には子どもたちに関わることができる若者が全くいないとは言えないと思います。現状では、中学校に入ると子ども会から出ていく人が多くなりますが、働きかければ残ってリーダーとして活躍してくれる例もあります。仮にそこで途絶えたとしても、高校生になって、その段階でまた働きかけると戻ってきてくれる人たちも中にはいます。やはり絶えず働きかけがいると思います。

小学校区を単位に地域のいろいろな団体がありますし、小学校区ならではの取り組みもあります。このビデオにも出てきましたように、中学生も巻き込んでいくことがこれからの課題だろうと思います。中学校に働きかけて、その小学校区の中での中学生の存在に目を向けていくことができます。子ども会OBも中学生にいるのですから、絶えずというのは難しくても、ときにはその人たちを巻き込んでいく活動を続ければ、活動を継続してくれる人たち、あるいは、戻ってくる人たち、もう少し年を重ねてからまた関わってくれる人たちというのも出てくるわけです。小学生は全員というふうな関わり方も可能でしょうが、中学生は始めから全部丸抱えにしようとしても難しい年代ですし、有志といいますか、少しでも関わってくれる人たちを見出していくという働きかけがいると思います。小学生とともに中学生にも関わりを持っている、そのようなネットに「はぐくみネット」がなればいいなと思います。

また、最近は若い人たちの中で子どもに関心を持つ人たちも増えてきています。いま、私が関わっています、池田を中心に活動しているグループには、大学生や、高校生、さらには社会人で 20 歳代そこそこという人たちがプレイリーダーとして関わっています。まさにボランティアで、そういうことをやろうという若者も実際には増えています。でも、子ども会の方では、どこにそのような若者がいるのかわからない、また、若者の方もどこへ行けばそのような活動が可能なのかが分からないのです。いろいろな情報を活用しながら、活動の場の紹介や人の確保が進められなければなりません。大学の中にボランティアセンターを設ける例や、地域でもボランティア情報を提供する例なども出てきて、そのような体制がようやく徐々に整いつつあります。

「近頃の若い者は･･･」というセリフは、古代エジプトの時代から言われているそうで、いつの時代でも若い世代とのギャップは大きいのですが、子どもたちに関わろうという若者を見出すことで、活動が活発になっていけばいいと思います。

(3) 地域団体との関係

地域で子どもに関わる活動として、青少年指導員の仕組みがあります。特に、大阪市の青少年指導員は、全国でも誇れる仕組みだろうと思います。他市でも、青少年指導員が設けられていますが、名誉職的な形になっているところや、年齢的にも高い人がなっているところが少なくありません。校区に一人しかいないところもあります。その点、大阪市では町会単位で青少年指導員が委嘱されていますし、比較的若い人たちが委員になっています。地域の中でいろいろな人とつながりながら活動することによって、さらに子どもたちへの関わりがスムーズになっていきますから、こういうコーディネイトも、まさにこの「はぐくみネット」でやっていくことが期待されると思います。

青少年指導員以外にも、地域にはいろいろな団体があります。大阪市には地域振興町会や、社会福祉協議会があります。校区社会福祉協議会には、青少年部などの部を設けている例もあります。もちろんPTAもあります。いろいろな団体がある中での「はぐくみネット」ですから、お互いの連携を強め、情報を交換し、協力しあっていくことが重要です。

先ほどの公民分館の場合も、運営委員にはいろいろな団体の人たちに入ってもらっていて、そこで活動の調整も行います。「その日は、うちと活動の日が重なっている。何とか調整できないか」 「それなら一緒にやろう」という調整ができるだけでも大きな意味があります。ですから、一緒になって立ち上げるような活動もさることながら、それぞれの活動の調整、あるいは協力の取付け、少なくとも、周知徹底といいますか、情報がスムーズに流れるということが重要なのです。どこの団体がどういった活動をしているか他の団体にはわからないということでは、活動にも支障がでてきます。

これは大阪市の例ではありませんが、「最近、学校5日制になったのはいいけれども、子どもが忙しくなってしまった。土曜日にいろいろな団体が子ども対象の事業を計画していて、参加するかどうかは本来、自由だけれども、働きかけがあると、あっちに子どもを行かせなければ義理が悪いし、こっちの活動をほっておくわけにはいかない」などの悩みを持っているところがあります。活動が活発になってくることは望ましいことですが、お互いの連携がとれていないと、親も子どもも戸惑い、混乱が生じてしまいます。学校週5日制が完全実施になって、子どもが外の活動に全て参加しなければならないということはありませんが、子どもたちの自由にさせるといっても、何もしないで終わる、あるいは逆に非常に商業主義的な刺激の多い世界に子どもたちが取られていくことがあっても困るわけです。「この日は子どもたちの自由にさせよう」とか、「この日はうちが何かやろう」とか、あるいは、「皆で一緒に何かやろう」というように調整をしていくことが大事になってきています。

今、子どもの育ちを支えていく地域の中での取り組みが求められており、「はぐくみネット」は、まさに地域のいろいろな団体の活動や、あるいは、学校の教育をつないでいく、大変重要な意味を持つものです。すぐに「何か新しい行事を」とお考えのところもあるでしょうが、それぞれがもっている力を発揮できるように、お互いの情報交換や、協力関係を強めていくことが重要になると思います。

(4) 学校との関係

従来、社会教育関係者や青少年指導員が、子どもたちの状況をいろいろと知っていても、その子が学校でどうなのかということはなかなかわかりませんし、逆に学校の方も、子どもたちが地域の中でどうかということは必ずしも見えやすいものではありませんでした。ところが、青少年指導員をはじめとして地域の人が学校に子どもの様子を聞きに行っても、学校の方もプライバシーの問題がありますから、うかつに話すわけにはいかないというような姿勢をとられたりして、なかなかコミュニケーションがうまくいかなかった面があります。しかし、子どもが育っていくためには、学校で子どもたちがどうしているか、教育はどういう形で行われているか、一方、地域では子どもたちの姿はどうかということを相互に知る必要があります。地域の人たちが、子どもたちが学校でどのように学んでいるかを知ることによって、地域の中で取り組むべき課題を見出していくことができるような仕組みが必要なのです。「はぐくみネット」ができてきて、学校教育と地域をつなぐことができるということは非常に大きな意味がある

と思います。

近年では多くの学校が「学校だより」を保護者だけでなく地域の人々にも配付するという形で、学校の姿を知ってもらうという取り組みもされています。そうすることによって、子どものいない人であっても、子どもを見て「ああ、これは地域の子どもだ」と、関心をもってもらう可能性も出てきます。学校教育への支援についても、PTAだけではなくて、それ以外の人々も巻き込んでいくことが、可能になると思います。「はぐくみネット」では情報誌の発行に力を入れて取り組んでいるとのことですが、学校教育の情報に地域の情報もあわせて、広く地域の皆さんにお届けするというのは大変重要な取り組みと思います。

また、今日、学校で「総合的な学習の時間」が設けられて、子どもたちが取り組みの中で、地域に関わることが多くなっています。学校教育では、教職員だけでなくて地域のいろんな人たちに学校に入ってきてもらって、子どもたちに関わってもらうようになってきています。確かに、具体的に経験した人から話を聞いた方が、本で読んだり、あるいは、人から聞いて話したりするよりも迫力を持って伝えることができますし、それによって子どもたちが地域を知り、また、生活に直結した形で学ぶことができます。これらの活動を学校教育の教育的な配慮の中に位置づけ、学校教育の立場からコーディネイトしていくということが、教職員に求められています。

「何のためにこれを学んでいるのかわからない」、「学んだものと実際の体験とがずれている」ということではなくて、まさに地域の中にある問題を材料にして、「学校教育でそれについての典型的な説明が行われる」、あるいは、「学校で学んだものを実地に生かしてみる」という取り組みが始まっています。先ほどの「地図づくり」もそうです。どういうふうに地図を書くかということは学校教育の中で指導ができるし、それを実際に自分たちの地域の中で活かしてみることで、子どもたちも学習に興味を持ち、生きた学習が行われるのです。

今日、「学社融合」というように、学校教育と社会教育との連携以上に、お互いの重なりというものをもっとやっていかなければならないと言われています。そういう中で、学校教育の課程にそって地域の活動が組み立てられるということや、地域の活動を材料にして学校教育の中で生かすということも重要となっています。そういう意味でも、学校で今、何を子どもたちが学んでいるか、あるいは、地域でどのような活動があるかということを、学校の関係者、あるいは地域の関係者両方が良く知り合うということが大事になってきています。

5. さいごに

今、「はぐくみネット」が組織され、そして、いろいろな活動の調整を行いながら発展しつつあるということは大変意義のある事だと思います。皆さんは、ずいぶん忙しくなっておられるでしょうし、やはり、立ち上げるというところでは、大変ご苦労が多いことと思いますが、そういう中から次第に、地についたものができ上がっていくのではないかと思います。やはり、気がついた方が始めないと、なかなか形あるものになりません。

まさに、子どもたちは大事な一瞬一瞬を生きているわけで、小学生の子どもたちが今をどう生きるかということが中学生になってからの行動につながり、それが子どもたちの将来に関わっていきます。だからこそ、小さい子どもの時から子どもたちが認められる場づくり、子どもたちが大人とよく知り合って互いに学び合えるような環境作りをご用意いただければ大変ありがたいと思います。

注文ばかりが多いような話を申しあげて恐縮です。おすすめいただいていることが大変意義あることと思っており、皆さんの今後のご活躍を大いに期待申し上げております。